Acanthus

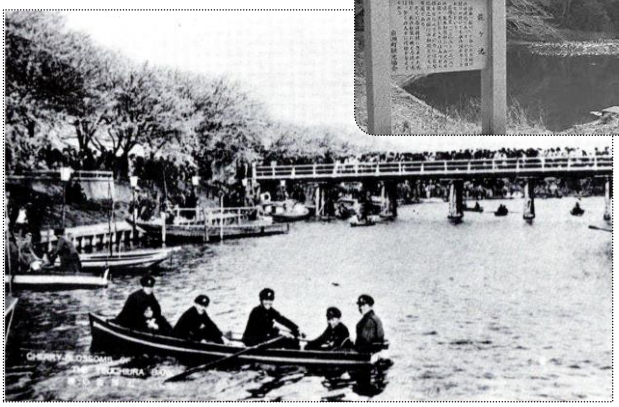
（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

第１４９号

2021（令和３）年10月19日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

進修同窓会 HP にアクセス

「鏡ケ池」



「桜川堤の桜」（（昭和11年頃）『ふるさとの想い出写真集』より）

桜川１　～春の弥生は桜川～

道元禅師が、「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 冷【すず】しかりけり」と詠んだように、日本では、桜花が春を、月が秋を代表する景物（けいぶつ 花鳥風月など、四季折々の風物）となっています。土浦中学校歌（現土浦一高校歌）の作詞者堀越晋（中11回）も、その２番で、桜川の桜と霞ヶ浦の月とを詠い上げています。しかし、校歌が作られた1910［明治43］年には、土浦を流れる桜川では、苗木が植えられたばかりでした。

敬称を略し、旧字体は新字体に改めました。また、引用文中の【　】内は筆者による注記です。

桜川

桜川の源流は、岩瀬の雨巻山の麓にある「鏡ケ池」（桜川市山口）です。ここから西に流れ出て、桜の名所として名高い、謡曲『桜川』の舞台・磯部を過ぎ、ＪＲ水戸線岩瀬駅付近で南に流れを転じ、加波山・足尾山・筑波山の西麓を潤し、土浦で霞ヶ浦に注いでいます。全長63km余、流域面積は345㎢に及びます。

東の桜川

「桜川」の名は、歌枕として古くから知られ、平安初期の代表的歌人であり、『古今集』の撰者でもある紀貫之（871?～946）も、「桜川といふ所ありときき て」との詞書を添えて、「常よりも 春べになれば 桜川 波の花こそ 間なく寄すらめ」（『後撰集』）と詠んでいます。しかし、この桜川は、土浦付近のそれではなく、上流部の磯部（桜川市岩瀬。磯部稲村神社・磯部桜川公園周辺）の桜川です。紀貫之は、この磯部を実際に訪れたわけではありませんが、桜川の名は、都の人々にまで、すでに知られていたことがうかがえます。

室町時代には、能の大家世阿弥が、この地に伝わる悲話を題材に、謡曲（ようきょく）「能」の歌詞の部分で、演劇における脚本に相当する。謡うたい とも言う。）『桜川』を創っています。こうして、磯部の桜川は、桜の名所「磯部百色桜」として、広く知られるようになり、「西の吉野、東の桜川」と並び称されてきました。

1694［元禄7］年には、水戸光圀が見物に訪れ、磯部の桜を水戸の見川に移植し、それを「桜川」と命名しています。また、八代将軍吉宗も大岡越前守に命じ、磯部の桜を吉野のそれとともに、元文年間（1736～1741）に武蔵小金井に移植させました。1750［寛延3］年には、江戸城にも植えられ、飛鳥山の桜も、磯部から移植したもの、と言われています。

桜には、東北産のシロヤマザクラとその変種の、梅鉢（うめはち）・桜川匂（さくらかわにおい）・薄毛（うすけ）・白雲（はくうん）・初見（はつみ）・樺匂（かばにおい）・青（あお）・青毛（あおけ）・源氏（げんじ）・大和（やまと）・初重（はつがさね）などがあり、淡紅色のもの、花梗（かこう花の柄）に毛のあるもの、芳香の強いもの、などの珍種も混じっています。

磯部の「桜川（サクラ）」は、1924［大正13］年、国指定名勝となり、さらに1974［昭和49］年には、国指定天然記念物にもなっています。

西の吉野

現在、桜と言えば、残念ながら磯部ではなく、まず1番に挙げられるのが、吉野です。4月上旬から中旬にかけて、下千本から中千本、上千本、奥千本へと、3万本にも及ぶシロヤマザクラが、谷から尾根までを埋め尽くし、豪華絢爛に咲き乱れていきます。谷から舞い上がる花びらに包まれると、西行が、「吉野山 こずゑの花を 見し日より 心は身にも そはずなりにき」と詠んだように、不思議な陶酔感に誘われます。

神武天皇の東征はともかく、吉野山は、古くから、歴史の舞台としても登場してきました。その1つが、古代宮廷内部における皇位継承をめぐる最大の内戦であった壬申の乱です。兄である天智天皇の粛清を恐れた大海人皇子は、出家して、妃の鸕野讃良（うののさらら）皇女（天智天皇の娘。後に天武天皇の皇后となり、天武天皇が亡くなると、持統天皇として即位した。）とともに大和国（奈良県）吉野に逃れていました。が、天智天皇が亡くなると、672［弘文天皇元、天武天皇元］年に吉野で兵を挙げ、東国（美濃、尾張）からの軍事動員に成功して、弘文天皇（大友皇子。天智天皇の子）を破り、天武天皇となりました。持統天皇は即位後、31回も吉野を訪れ、吉野で過ごした天武との日々を懐かしんでいます（死後には天武天皇陵に合葬されていることからも、叔父でもある夫の天武への思慕の情の深さがうかがわれる。）。その行幸（ぎょうこう みゆき 天皇が外出すること）に随行して歌を詠んだのが、宮廷歌人であった柿本人麻呂です。彼は吉野の歌を何首か詠んでいますが、そこに桜は登場しません。

吉野の桜の起源は、約1300年前、修験道（しゅげんどう）の開祖とされている役小角（えんのおづぬ）の伝（注1）634～706年。役行者（えんのぎょうじゃ）とも呼ばれる。）が、熊野や大峰の山々で修行を重ね、吉野に蔵王大権現（ざおうだいごんげん）を本尊とする金峯山寺（きんぷせんじ）を開き、そのご神木を桜としたことです。そのため、蔵王権現に祈願する際には、桜の苗木を寄進するのが最善の供養になるということになり、平安時代に金峯山寺への参詣が盛んになると、こぞって、桜を植え敬うようになったと言われています。吉野の桜には1300年余もの歴史が刻まれています。

植樹が進むにつれて、吉野の桜の人気は高まっていきますが、その人気を決定的なものにしたのが、西行です。彼は吉野に庵を結び、多くの歌を残しました。同じ頃、兄頼朝に追われていた源義経は、吉野で静御前と別れ、奥州まで落ち延びて行きました。さらに、後醍醐天皇、楠木正成、豊臣秀吉、松尾芭蕉、本居宣長など、多くの人が訪れ、さまざまに、歴史の舞台・吉野に登場してきました。ここには、こうした人々ゆかりの神社仏閣・史跡が点在し、桜とともに、この地の魅力の1つとなっています。

江戸時代後期の土浦の地理学者沼尻墨遷（ぬまじりぼくせん）（注2）は、古稀（70歳）の年に、「西の国に杖引かん」と思い定め、伊勢神宮、奈良、金比羅宮、大坂、京都、善光寺と95日間に亘る旅に出て、旅行記『西杖日記』を残していますが、44日

目に訪れた吉野については、次のように記しています。

「……。吉野山蔵王権現社領五百石なり。躑躅【つつじ】の丸柱一本廻り八尺、長さ三丈二尺と云【いふ】。大鳥居唐銅【からがね】の額、法【発】心門の三字大師の筆跡なり。吉水院【きつすいゐん】現吉水神社】は南朝五十八年の皇居、この所なりと云。

こゝに九郎判官【義経】潜居して、是より奥州へ落下られたり。遺物色々あり。山中に後醍醐帝の山稜ありて、楠正行【まさつら】が如意輪堂の扉板に鏃【やじり】もてゑ【彫】り付けたる歌、今猶存するよし【由】。其歌に『梓弓 引きかへらじと おもふより なきかずに入る 名をぞとゞむる』(注3)。この山中一面古木の桜はびこりて他木なし。春陽の頃ほひ思ひやるべし。

僕等【やつがれら】こゝに来たりしは皐月の頃なれば、青葉おほひかさなり、下蔭久しく物斎【ものいみ】し。

白雲や 霞とすさむ 言の葉の 積りてぞこの 八重の葉ざくら

……。」

墨遷が、「山中一面古木の桜はびこりて……。」と記しているように、江戸後期においても、吉野の桜は見事でありました。彼は、桜花を偲びながら、葉桜には、源義経・後醍醐天皇・楠正行らの遺した言の葉が積もりに積もっている、敗れ去った者たちの無念の思いが折り重なっている、との感懐を抱いたようです。

(注1)**修験道**
日本人は、古くから、山には神々が宿ると信じ、その神々を信仰する山岳信仰を持っていた。そのため、山自体をご神体として拝み、ご神体である山の中に入って修行することにより、呪術的な験力（けんりょく）超自然的な能力・霊験を現わしうる能力）が得られると信じてきた。これが修験道の始まりである。修行者（修験者）は、山に伏して修行するので、山伏とも呼ばれた。

(注2)**沼尻墨僊**（1775～1856）
江戸時代後期、土浦で「天章堂」という塾を開き、500人を超える弟子を育てた人物で、天文学にも優れ、傘式の地球儀を製作したことでも知られる。墨遷の業績は、土浦市立博物館の常設展で紹介されている。

(注3)**「梓弓 引きかへらじと……」**
楠木正行が、足利尊氏方の大軍を四条畷（しじょうなわて）・現大阪府四条畷市）に迎え撃つための出陣に際し詠んだ、辞世の歌。正しくは、「帰らじと かねて思へば 梓弓 なき数に入る 名をぞとゞむる」（勝ち目のない戦で、生きては帰れまいと思うので、生きていた証しに、名をここに刻んで、死地に赴こう。）

土浦の桜

明治から大正時代の土浦の花見は、小松の三夜様か、真鍋の愛宕神社の公園総宜園でした。桜川の土浦堤には、明治の末まで桜は植えられておらず、そのため、「花もないのに 名は桜川 柳芽張れば 魚躍り 水もないのに 荒川沖 尾花波立つ 松原続き 夫婦連れにて 木の子【茸】狩り」と俗謡に唄われていました。

「後醍醐天皇陵」
天皇御陵としては唯一の「北面の御陵」

「大町道祖神」

「植樹碑」

樹碑」が建てられている。)に妻の足の病気平癒の願を掛けたところ、たちまち全快したので、その御礼として桜樹200本を寄贈し、大町の消防組によって、銭亀橋から道祖神付近の土手に植えられたのが、土浦堤の桜の始まりです。

1915[大正4]年の春には、大正天皇の御大典記念植樹として、大町5人・田宿町5人・中城町8人の各消防組の有志によって、1000本の苗木が常磐線から川上に向かって植えられたことが、桜町の下水道ポンプ場側の土手に建っている「桜樹記念碑」に刻まれていますが、その当時の桜川は、土浦の町並みから田圃を隔てた流れで、普段は人も通らない荒れ放題の土手であり、川幅も今の半分くらいの、曲がりくねった川でした。

しかし、大正末期には桜が見事に育って、昭和初期には、土浦からつくば市小田付近まで延々10数km に亙り、総数3500本の花のトンネルが続くようになりました。特に阿見に海軍航空隊が開かれると、道路(海軍道路・旧国道125号)ができ、桜川橋、匂橋が架設され、桜町一帯の埋立が完成すると、土浦の料理店や飲食店が集団移転させられ、1927[昭和2]年には、二業地(芸者屋と料理屋との二業が許された地域)と呼ばれる花街(はなまち)ができあがりました。

土浦堤の桜の最盛期は、1929年から1938年までで、春の花見時には茶店が並び、常磐線や霞ヶ浦航路の客船に乗って、大勢の観光客が訪れ、川面には、屋形船をはじめ、霞ヶ浦沿岸各地から花見にやってきた漁船までもが浮かんでいました。銚子や佐原方面から普段は貨物を運んでいるダルマ船にも、花見客があふれていました。東京鉄道局管内の「桜の名所16ヶ所」に土浦堤が選ばれると、土浦商工会でも宣伝に力を入れ、常磐線の各駅にポスターを配る、絵葉書を作る、などしました。

桜川に架かる常磐線鉄橋の所から銭亀橋までの1km強の桜樹には、各商店の広告のぼんぼりが延々と灯され、花街に遊ぶ酔客をはじめ、大勢の市民が、昼も夜も桜川堤での散策を楽しんでいました。また、東京電力特設の投光器3基や桜川橋の上のイルミネーションの光などで、桜川の堤が照らされたので、「桜川の桜の広告ネオンサインと桜川橋上のイルミネーションとが、水に花に一大不夜城を現出して、満開期の桜花に反映して美観を呈した。」と土浦商工会誌は報じています。

しかし、土浦堤の桜も、1938年・1941年の大洪水により樹勢が衰え、戦中の放置と戦後の土手改修により、残念ながら、一部を残すのみとなりました。

しかし、先人たちが植樹を続けたように、これから、私たちも、桜川の河畔のみならず、霞ヶ浦湖岸、つくば霞ヶ浦りんりんロード、さらには小田山・筑波山に桜を植え続けていけば、吉野に負けない名所になると思います。

春の弥生は桜川

堀越晋は、1910年の夏休みの課題として校歌を作詞したのですが、土浦の桜川には、苗木が植えられたばかりでしたから、彼は、紀貫之の「常よりも 春べになれば 桜川 波の花こそ 間なく寄すらめ」を踏まえて(「本歌取り」して、)、「春の弥生は桜川 その源の香を載せて 流れに浮かぶ 花筏」と詠んだのでしょう。また、花の香と言えば梅花が一般的ですが(「東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花 主なしとて 春な忘れそ」菅原道真)、「其の源の香を載せて」と綴っているのは、磯部にある、芳香の強い桜のことを知っていたのだろうと思います。

※参考文献 『水郷つちうら回想』保立俊一（中29回）

（高21回 松井泰寿）